

特別講演会のお知らせ

演題：「脳 MR スペクトロスコピーによる後部帯状回における N-アセチル-L-アスパラギン酸／ミオイノシトール比の低下は将来的アルツハイマー病発症のリスクマーカーになりうる
— 健常高齢者 289 例の 7 年間の追跡検討 —」

演者：藁谷正明 先生

(松戸市立東松戸病院 神経内科)

東北大学加齢医学研究所老年医学講座 非常勤講師)

日時：平成 29 年 9 月 15 日 (金) 17:30～19:00

場所：北海道大学薬学部 1 階 臨床薬学講義室

主催：北海道大学 大学院薬学研究院

共催：日本生化学会北海道支部

概 要

アルツハイマー病 (AD は、中核症状が出現してからの介入は遅く、臨床症候がないが、病理学的には大脳皮質に異常アミロイドの沈着が進行している、いわゆる発症前期“プレクリニカル AD” 期からの介入が重要である。プレクリニカル AD 期を診断するため、アミロイドやタウ PET 等が開発され AD の発症前診断、分子病態把握に優れているが、日常臨床診療では実用的でない。プレクリニカル AD 期の対象者をスクリーニングで抽出し、抽出された対象者に対し、intensive therapy を行うことが有効と推測されるため、簡便、非侵襲的、安価である血液、MRI 等の画像診断を用いたプレクリニカル AD スクリーニングの構築が理想である。本邦では MRI による AD 診断として海馬萎縮を評価する構造的 MRI : VSRAD が有用で、普及しているが、海馬萎縮 (形態的異常) を認める段階の多くは既に臨床的に AD/軽度認知障害 (MCI) を呈している。我々は、形態的変化を認める以前の生化学的異常を検出する目的で、通常の 1.5 テスラ MRI による脳 MR スペクトロスコピー (MRS) を用いて AD の病態に重要とされる後部帯状回域の解析を行った。ランダムに選択した健常高齢者 289 例をベースラインから 7 年間臨床的に追跡した。7 年後に、200 例 (60%) は認知機能正常維持群であった。一方で、53 例 (18%) は MCI、21 例 (7%) は AD、8 例 (2%) がパーキンソン病 (PD)、7 例 (2%) が dementia with Lewy bodies (DLB) を発症した。AD、MCI、DLB 発症例ではベースライン時で、N-アセチル-L-アスパラギン酸 (NAA) /ミオイノシトール (MI) 比が明らかに認知機能正常維持群より低値であった。MMSE スコアと NAA 値は明らかな相関を認めた。後部帯状回の NAA/MI の有意な低値 (ROC 解析 : cut-off value of < 1.67) である対象者は AD 発症危険群であると思われる。今後、MRI (VSRAD、MRS) とこれまでの髄液及び新規開発血液診断マーカー等を利用し、プレクリニカル AD スクリーニングの構築を目指したい。

連絡先：北海道大学大学院薬学研究院 神経科学研究室
鈴木 利治 (TEL : 011-706-3250)